

年頭所感

会長野口駿雄

新年明けましておめでとうございます。年頭に当たり会員の皆様並びに関係各位の益々のご健勝とご多幸を、また、会員各社の更なるご発展を祈念いたしております。昨年は、本会のためご協力、ご教導を賜り厚く御礼を申し上げます。本年も、何卒研究会発展のためご協力、ご支援を賜りますようお願いを申し上げます。

さて、昨年は、4月30日に天皇陛下が退位され5月1日に皇太子さまが天皇に即位され、令和という新しい元号に変わり、国民は奉祝ムードに包まれました。国民の感情が心機一転され、新たな年に向けて社会面においても経済面においても好転することが期待されました。

しかし、その一方で、残念ながら園児などへの無差別殺傷事件、幼児や児童への親の虐待による致死傷事件、強盗殺人、誘拐事件など悲惨な事件が相次ぎ多発しました。犯罪者の年齢を見てみると30代から40代で無職の男性が多く、中には引き籠りもいたようです。また、相変わらず高齢者の運転ミスによる事故、老々介護による疲労や引きこもりによる親子の対立などによる身内の殺人なども起きました。高齢者の運転につきましては、郊外に住む人たちの話を聞きますと、過疎化の為か公共交通機関が少なく、運転回数も減り、買い物や医療機関へ通うにも不便で、高齢になっても運転免許証は手放せないと言う話も屡々耳にします。

高齢者の介護では、80代や90代の親または兄弟姉妹を60代から70代の子供や兄弟姉妹が、介護をしなければならない老々介護の時代が来ているようです。経済的な理由や施設の不足または近くに開設されていない等の理由により身内で介護を強いられている家族も多いと聞きます。その為に、介護疲れで止む無く親、兄弟姉妹に手を掛け、無理心中を図ったりする例も報道されました。

医薬関連の研究も進み、人生100歳の時代になってきたと言われています。少子高齢化が進み将来が危惧されています。昭和30年代後半より高度成長期が始まり、昭和48年のオイルショックまで経済成長は続き、出生率も上昇傾向にありました。しかし、昭和49年のベビーブームを最高として、その後出生率は減少の一途を辿っています。このまま少子化が続けば、将来、若者一人で数人の高齢者の年金を支えることになると言われています。

昔は、二世帯の同居が当たり前のことでしたが、企業の地方への進出、逆に中央への集中などにより単身赴任や一世帯での転勤などにより核家族が増加しました。そして、女性も働くようにと女性の社会への進出も促されました。然し、女性の社会進出に伴い、同時に保育所などの幼児を預かる施設も必要になりますが未だに不足状態で、子供が生まれることを前提に、結婚と同時に、所謂「寿退社」をせざるを得ない状態が続いています。少子化や女性の社会への進出を阻む原因の一つではないでしょうか。二世帯で暮らすことは経済的な事情、親子関係、嫁姑関係など家族間での多くの問題が生じますので二世帯同居は良いと、一概には言えませんが、一時流行語になりましたような「鍵っ子」と言うことは無くなり、両親は安心して働きに出かけられるのではないでしょうか。

いざれにせよ、数々の最近の事件を報道内容から考えますと、身勝手な、自分さえ良ければ、と言う人物による犯罪が殆どのように思います。あおり運転や無差別殺傷事件、幼児の虐待・暴行事件などはその典型的な事件でしょう。一日も早く平和で事件の無い日々の来るのを願って止みません。

(令和元年12月8日記)

年頭所感

奥野製薬工業株式会社
社長 奥野和義

新年明けましておめでとうございます。

本研究会のメンバーの皆様には、お健やかに新年をお迎えになられましたこと、謹んでお慶び申し上げます。

昨年は内外で激動の一年でした。国内では令和の年号になりめでたく天皇陛下がご即位され、10月には即位礼正殿の儀が、また11月には天皇皇后陛下の「祝賀御列の儀」のパレードが盛大に執り行われましたのは記憶に新しい出来事でした。一方、近年まれにみる台風19号などの豪雨に遭われ、被災地域の住民の方々に大きな心の傷跡を残しました。

海外では英国のブレグジットやドイツの新たな分断、ウクライナ問題、トルコ、イラクを含む中近東問題がくすぶり、はたまた北朝鮮のミサイル発射、香港のデモ騒動、韓国の反日化など近隣諸国にも気を抜けない諸問題が山積しております。暮れには中国成都で日中韓の首脳会談が開催され、隣国間で東アジアの危うい均衡が改めて浮き彫りになりました。

一方、一昨年からの米中貿易摩擦により中国国内の生産減や消費低迷の影響を受け、また昨年11月施行の消費税増税も重なり国内の景気動向も芳しくない方向に向かい一つあるのが懸念点です。今年の目玉である東京オリンピック、パラリンピックの開催で日本選手の活躍を期待しつつ、これを契機に世界に向け日本のすばらしさを発信したいものです。

昨年の最大のトピックスは旭化成の吉野彰名誉フェローが2019年のノーベル化学賞受賞に輝いたことでしょう。現在、誰もが恩恵にあずかっていますスマートフォンやノートパソコン、EVなど幅広い用途に使われ、また再生可能エネルギーの貯蔵にも利用されるリチウムイオンバッテリーを発明し実用化した功績に対し評価されました。吉野氏は「企業では基礎研究から製品まで一気通貫で研究できたことが功を奏した」と話しておられました。「素材を開発しないと乗り越えられない壁が随所にあり、素材を自ら開発する立場にあったからこそ電池形成の基本発明ができた。」とも語っておられます。開発当初のポリアセチレン樹脂に代わる炭素材料の発見など、素材の探求が電池の実用化と普及のカギとなったようです。旭化成は電池材料の実用化の執念も